

ヨーロッパの文明思想が限界を迎えた

「これから社会や世界はどうなっていくのでしょうか」という質問をされても、「さっぱりわかりません」と答えるしかないような状況になってきました。日本の場合には地震とか噴火、大型の台風とか何が起きるのかわからないし、経済・政治・社会のほうもこれから何が起きるのかさっぱりわからない。「何が起きても不思議じゃない」と言うしかない。

このことを背後に感じながら、本日は次のような話をしてみようと思います。ヨーロッパが近代につくりだした思想がいまの文明世界をつくっていったわけですけれども、その限界がより明確になってきた。そういう時代の私たちの生き方はどうあつたらよいか、そのあたりを軸に話したいと思います。

ひとつ言えることは、近代になってヨーロッパがつくった思想というのは「世界には普遍思想がある」という考え方でした。1789年にフランス革命があつて、そのときに「自由・平等・友愛」というスローガンがでた。それがある意味では近代の普遍思想になり、さらに政治的には議会制民主主義が政治の基本になり、経済的には資本主義が世界の普遍的な経済システムみたいな、そんな感じになっていったと言つてもよい。そういうものがいずれも限界がきた

なという、いまそういう時代を迎えています。

普遍を追求することの無理

そもそも、「普遍思想」などというものはあるのでしょうか？ ゆるやかに「こういうことは大事にしましょうね」というぐらいの思想はあってもいいかもしれませんが、思想というものはもっとローカルなもので、日本の風土に合った思想とか、中国の風土に合った思想とか、ヨーロッパの風土に合った思想とか、そういうものが本来の思想ではなかったのかという気がします。経済のあり方などについても、もっと地域ごとに独自の経済のあり方があってよかつたのではないか(*1)。

実際、自然とか風土を相手にせざるをえないような分野、農業が代表的ですけれども、それ

(*1)「もしある哲学が絶対的な真理だということになったら、人間がその哲学に命令されるというおかしな

ことが発生してしまうのではないか」④『哲学の冒険』(138頁)

「万国共通の自然や森の概念は重要ではない。……自然も森も本質的にローカルなものとしてあるのだと私は思う」⑩『森にかよう道』(157頁)

「近代以降の社会は、第一に場所的普遍性の論理の追求と、第二に時間的普遍性の論理の否定の上に展開された」⑥『自然と人間の哲学』(221頁)

は「世界の普遍農業」とはいかなくて、アメリカ農業のかたち、日本農業のかたちとか、やはり自然が違うわけですからやり方も違って当たり前なわけです。農村とか地域社会のつくられ方もやはり地域によって違いがでてくるのが当たり前で、風土とか自然に根ざしてれば、どうしてもそこにはそれぞれのローカル世界の違いが出てくる。

ところがそれを、世界中同じでよいという考え方で展開したのが近代という時代です。いまでもそれを追求している人たちは、農業でも、「世界共通農業」があるかのごとく発想で「日本農業は強い」とか「弱い」とか言っています。

それから、普遍——グローバルと言いつても構わないのですけど——を追求していくと、一番グローバルなものは何かというと、じつはお金なんです。たとえば1万円というお金は、東京にいても会津にいても、私の上野村にいても、どこにいても同じ1万円です。ドルも、アメリカでも日本でもヨーロッパでも、世界中どこに行っても100ドルは100ドル。円に換金すれば日本でも同じように使えるし、ましてや海外との取引などをやっていけばそのまま使えます。まったく違いがない、つまりグローバルであるということです。

生産物には、文化的、風土的、自然的、歴史的なものが付着してきます。たとえば最近はお食に人気がありますけれど、日本料理にしか合わないような野菜もあって、それはある食文化のなかにおいて成立する野菜だと言えます。逆に、海外の食文化にははまるけれども僕らの口

には合わない野菜もあつたりします。ところが、お金だけは文化も、風土も自然も歴史も一切付着していない。つまり、グローバルなのです。

だから、普遍とかグローバルを追求する時代というのは結局、お金というものが最大の権力になる。お金が巨大権力となつて世界を牛耳っていると云つてもいい(*2)。

ところがそのお金というのがじつは虚構なのです。野菜だったら実体があるわけですけど、お金については「みんなが信用しているからお金である」というだけの話であつて、日本のお金だつて日銀が勝手に刷っている紙切れみたいなものなわけですけど、それを信用力のある紙切れとして、国が支え、日銀自身も支えている。私たちもそう思つて使っている。だから実体としてはひとつの虚構なのに、あたかも実体があるかのごとく存在する。

こうして、虚構が世界を支配してしまふ。そういうことが次々に発生してしまいます。

(*2) 「ヨーロッパの伝統思想は、すべてのものの動きをひとつの秩序のなかにとらえ、理想の秩序は確立しうると思える共通の精神をもっていた」「問題にされなければならぬのは、この秩序理論である」⑫

『貨幣の思想史』(85、120頁)

経済統計の虚構

いま、経済統計で明らかに変な操作がおこなわれていたというのが国会で騒ぎになり、政権からの指示があったのかどうか問題になっています。でも、そもそも統計自体がじつは虚構にすぎないものになっていて、正しい経済統計とは何なのかというのが非常に難しくなっている。

たとえば、新車を買ったとなると、GDP上、100万円とか200万円とかのお金が動いたということになります。それだけGDPがかさ上げされるわけです。ところが、その車を誰かが売却して誰かが買ったと、つまり中古車を買ったということになりますと、中古車はGDPに計算されないので、なぜかという、新車の時点でGDPの計算は終わっているということだからです。家のなかで、息子がお父さんの車をもらい、お礼に10万円出したというのと同じ扱いです。さらにその車がその後10回ぐらいくり返し売買されたとすると、生活している人間からは必要な車が入っているのですから、実体のあるものとして生活の役に立つのですけど、統計上はまったく意味のない行為になるわけです。ですからメルカリなどで中古品を買うのも、アマゾンで古本を買うのも、GDPに関係ないので。

それから、だんだん新品と中古の境が不明瞭になってもいます。たとえば、特に日本では、

外国の車を買う場合、驚くほど値引いてくれることがあります。なぜそんなことが成立するかというと、ひとつは、車のイメージを良くするために値段を上げておいて値引率を大きくしている場合もありますけれど、もうひとつは、販売店自身が新車を買って、まったく使っていない車を中古車としてユーザーに販売するというやり方がある。「新古車」というのですけど、そういうのがけっこう出回っていて、場合によっては100万円値引きしても成立してしまう。実際には乗っていないので新車なのですけど、統計上は中古車で、もはやGDPに反映されない。

洋服も、インターネットで中古の洋服を買うよりもバーゲンセールのほうが安いということが物によってはある。この場合、中古と新品とは何なんでしょう。さらに、新品で買ったけども試着しただけで体に合わなかったからそのまますぐに売った、となれば、これは中古なのか新品なのか。そういう微妙な問題がいたるところに発生してきている。实体经济を反映しないGDPが統計上も発生しているのです。

統計を偽造したのかどうか以前に、そもそも正確な統計とは何かということ自体がかなり怪しくなってきたのがいまの状況なのです。

現在、「戦後最長の経済成長がつづいている」と言われています。これはたぶん統計的にはそうなのだろうと思うのです。ところが実際には、皆が「どこが成長しているんだ」という気分になっていると思います。私たちの感覚としては経済成長などまったくくない。そういう意味

でも、虚構の統計に基づいているんなことが判断されている。

特に安倍内閣になってから、あの人は都合のいいことだけを言う人なものだから、たとえば「賃金は上昇しています」と言い張る。この間は、連合（日本労働組合総連合会）の統計を使っただけで、そう言っていた。ところが昔から言われているように、連合の、ということとはほとんど大手企業の正社員だけの統計です。中小企業はほとんど入っていないし、非正規雇用の人も入っていません。そんなものに基づいて「賃金は上がっている」と言われても困るんだけれど、という話です。それに、この間、税金も社会保険料などもかなり上がっていますので、わずかばかり賃金が上がったと仮定しても実際に使える可処分所得はみんな下がっているのが実態なのです。ともかくいまの政府というのは都合のいい数字だけをどこから探してきて、それを言い張る。言い張っていればなんとかなる、そんな感じのことをやっている。

国境も虚構

北方四島はこの国のものなのか。これも根本的に議論をしてもよいと思います。

国後島などは、知床岬のほうに行けば目の前にみえています。新潟からみる佐渡よりも近くにみえる感じですよ。だからこれがロシア領というのは、ちょっと気分と合わんな、という感じがします。かといって、日本のものかというのと、これも微妙な問題で、はっきり言えること